

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成17年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第45巻10月号(通巻555号)

風土



芋の露
神蔵器

波郷恋ふ水引草もかなかなも
高きより昼かなかなの深大寺
大櫓の涼風下ろす蕎麦処
そばすすする音して烏瓜の花
送火や坂を煙の這ひのぼる

日向水両手に掬ふ原爆忌
己が影出でず燈心蜻蛉かな
妹の掌の無患子の実の一語一語
秋めくやハンカチの木の葉ずれ音
二つ三つ爪に火ほどの茗荷の子
芋の露千里の道の一步踏む
水打つて並木の蕎麦に万太郎



竹間集

同人作品



羽拔鶏

鈴木とおる

乗せて貰ふ帰りトロツコ夏の雲
湖を抱く青嶺の中の秋田駒
羅の肩の息する通夜の客
骨を抱く長常口の蟬しぐれ
風鈴をはづしてよりの月日かな
夾竹桃白き巨船の停泊す
羽拔鶏葬の庭先横切りけり

七夕

外川 玲子

山小屋の振舞水や夏の雲
七夕の子規の机にふれてをり
遠まはりして子規庵の桔梗かな
入谷朝顔市
あした咲く「団十郎」を市に買ふ
大声で呼んでみたくて雲の峰
八月の冥さあつまる枕かな
秋めくや野に一と筋の忘れ水

みちのく

山田 暢子

溪流の白を離さず夏木立
水炎となりて激流風は秋
ひまはりと牛舎と芭蕉記念館
ひぐらしの声の中なる芭蕉の眼
炎天に触れむと石階千余段
世離れの一夜らんぷに夏惜しむ
結界に隠れし秋の螢かな

夏百日

— 塩田博久 —

朝 焼 や 早 発 ち の 靴 草 に 濡 れ
梅 雨 闇 や 秘 仏 を 拝 す 膝 固 く
門 ご と に 車 洗 は れ 梅 雨 晴 間
登 校 児 に す ひ か づ ら 垣 香 を 降 ら す
朝 す で に 暑 き 水 辺 や 牛 蛙
遠 雷 や 家 路 を 急 ぐ 耕 耘 機
黒 南 風 や ガ ー ド レ ー ル に 供 花 乾 く
通 夜 の 列 く ち な し の 香 を 進 み を り
太 宰 忌 や 鯉 太 ら せ て 滑 川
白 南 風 や 天 気 予 報 に ま た 騙 さ れ

鎌倉山耳痛きまでほととぎす
百日紅八角堂の幼稚園
下闇の底に水鳴る歌の橋
作務衣着て喫茶店主や心太
父の日や父眠る山遠くして
児の減りて犬増えし街夏休み
すれ違ふ老人見合ふ夏帽子
土用波小動の宮に注連太く
原爆忌万象灼くる静けさに
一つ灯に妻も物書く夜の秋

山河集

同人作品



神蔵
器選

明易し緋の五条袈裟棺に掛く

南 峯 栄蓮

権大僧正栄雄不生位涼しかり
おもかげの後ろ向きなり夜半の夏
御院主の柩とドライブ走馬灯
ぽつくりと大往生の鬼蜻蜒

行き先を決めかねてをり羽抜鶏

中村 洋子

水無月のロートレツクのをんなかな
うしろ手に考へてをり立葵
神楽坂打水の端流れ出す
都電ゆく面影橋の夏の雲

初蟬や平家池畔のカフエテラス

平田紀美子

向日葵の芯の暗さのうつむけり
青紫蘇を鉢に育ててをりにけり

水打つて鍬木清方美術館
風鈴市お大師詣りとなりにけり

梁に十六羅漢花南天下

山田 美江

夏雲や唐草模様の大鉄扉
木槿咲く江戸城日比谷見付跡
緑陰のソーラー時計の園にかな
芸人の街や六区の花鬼灯

待合はす屋上金魚売場かな

川崎 妙子

薫風や明珍鍛冶の由緒書
ふるさとの畳と気付く昼寝覚
白南風やセラピードッグと歩を合はす
草も木も黙るひととき油照

風土独語／神蔵 器



権大僧正栄雄不坐位涼しかり

南奉 栄蓮

平成十七年六月二十二日、栄蓮さんのご主人は、能登に旅の途中突然倒れられ、そのまま遷化された、お二人の楽しい旅であったところ思いもかけないご逝去、栄蓮さんの驚き悲しみはいかばかりであつたろう。心からご冥福を祈るばかりである。

水無月のロートレックのをんなかな

中村 洋子

ロートレックの芸術は、ドガから出発し、現代市井の生活に取材して、人間のフォルムと動きを鋭くとらえた。ドガから人工光線の効果、大胆な構図、それに日本の浮世絵版画に学んだといわれる。彼は人間にしか興味をもたず、その背景は単なる舞台装置としての役割にとどまるが、彼に描かれたどん底生活のモデルたちの姿は美しく驚くべき尊厳ささえしめしている。たとえば代表作「背後から見たすわる女」はロートレック自身「彼女のすばらしい背中を見るためにくるのだ」と言っているように、後ろから見た背中と頭だけであるが、この女の美しさ素晴らしさはまさに絶品である。

この句の「水無月」の季語は適切である。おそらくこれに勝る季語はなかるう。

待合はす屋上金魚売場かな

川崎 妙子

この句の屋上はこの屋上か解らないが、新宿でも伊勢丹や京王デパートの屋上では、夏のうちビア・ガーデンになっていて、一隅が金魚売場になっていたりする。

待合はせをするのはもちろん恋人同士と考えてもよいのだが、私は一つの家族ではないかと思う。お年寄夫婦が、小さな子供をつれた若い夫婦と金魚売場の前で待合わせしている。一家が外で皆揃って会うことは案外少なく、ささやかなことであるが、これも生きている幸せというものであろう。

梅雨明けや角の立ちたる塩の粒

柿沼 盟子

純粋な塩は化学的には塩化ナトリウムで、無色透明の正六面体の結晶である。しかし普通は、塩化ナトリウム以外にマグネシウムやカルシウムなどの夾雑物や水分を含むため結晶も不規則となり、色も白色はじめ種々の色を呈している。

塩の資源は大別して岩塩、天然鹹水、海水に分けられるが、日本の塩は四面海に囲まれているながら湿度、降水量などの関係で、海水の濃縮までを塩田でおこない、あとは真空蒸発缶などで水分を蒸発させ、固形塩をつくっている。

梅雨明けと共に暑さは一段と厳しく、空気も乾燥してくる。塩に含まれている水分も蒸発して塩はさらさらとしてくる。そして含有水分がなくなれば、眼にはそれと解らなくても、肌に感ずる感触は「角が立つ」ているのがよく解る。常に台所をあずかる主

婦や女性ならでは塩の湿りはよく解つても「角が立つ」までは把握できないのではないか。

東山よりの夕立に銚の立つ

武久 昭子

祇園祭は七月十六日の宵山と十七日の山銚巡行が庄巻で、特に山銚巡行で祭のムードは最高潮に達する。

銚立ては巡行に先立つて七月十日から十一日にかけて各町内ごとに行われる。巡行の日まで約一週間あるので一般の旅行者で銚立てを見ることはなかなかできないが、是非とも見学したいものである。最大の銚は重さ十二トン、高さ二十四メートル、車輪の直径三メートル、いよいよ真木が立つと一斉に歓声が上り拍手が鳴り止まない。四条通りの方から見ると、八坂神社の方向の彼方に東山が眺められるが、銚の立つと同時に東山からバラバラと净めの雨が降って来た。

朝顔は波郷の紺や市に買ふ

柴田 久子

朝顔の花は紺、白、紅、水色など多く、先年来「団十郎」などという新品種も人気を集めている。しかし朝顔は、

朝顔の紺の彼方の月日かな

波郷

の紺の花が一番よいのではないか。入谷の朝顔市に出かけた作者は、一通り市を見て歩きながらも、はじめから波郷の紺の朝顔を買うことに決めていたのではなからうか。

波郷の朝顔の紺の句について、波郷は「結婚はしたが職無く、ひたすら俳句に没頭し、鶴に全力を挙げた。韻文俳句を大いに興

さうとした時期であつたと自註している。昭和十七年作句集『風切』に収録されている句であるが、「紺の彼方の月日」に波郷は何を見詰め、何を心に決めていたか。この句から嘆息のなかにも、静かに激しい氣息が感ぜられる。

キンカンの広告塔や砂日傘

中根 美保

ここでのキンカンは、かゆみ、かぶれ、虫さされなどに効く塗り薬である。近年はムヒSなども発売されているが、キンカンの人氣は依然あるようで、どここの家庭でも一本ぐらひはあるようだ。キンカンの広告と砂日傘は関係があるといえはあるが、無いといえはない。どこかユーモラスで楽しくおかしい。仁丹や目薬などの広告ではこうはゆくまい。

毛利池に宇宙メダカの育ちけり

遊橋恵美子

一九九二年と二〇〇〇年の二度の宇宙体験は科学者毛利衛さんの頭と心に何を与えたのか。そして毛利さんと一緒に宇宙に行つて来たメダカはどうなのか。とにかく、毛利さんの池に宇宙に行つて来たメダカは育っている。

かき氷食べて作戦会議かな

中嶋 陽子

小学三年の良太君のPTAのお母さん方の作戦会議である。かき氷を食べながら賑やかに楽しい一時である。

風土集



神蔵 器選

黒南風に縄の男蝶の翔つごとし

伊丹

武久 昭子

東山よりの夕立に銚の立つ

朝涼の楔の腹の方位文字

神酒三升とどく銚蔵涼しかり

真木立つ間に扇子使ひけり

十割の四万六千日の蕎麦

横浜

中村 洋子

打水の「幾松」の門くぐりけり

勢ひのつく下り坂雲の峰

金魚売水をこぼして立ち去りぬ

青田道雨の近江となりにけり

朝顔は波郷の紺や市に買ふ

東京

柴田 久子

蛸や石けん匂ふたなごころ

拝み手の十指ふくらむ蛸の火

調律師来てをり垣に蝸牛

叱るにはあどけなき子や蝸牛

ひそやかにあるじの出入り沙羅の花

川崎

中根 美保

力溜めつつ吐きつつ海月泳ぐなり

吠ゆる前犬が息吸ふ溽暑かな

キンカンの広告塔や砂日傘

魚籠の藻の乾ぶを剥がす日の盛り

毛利池に宇宙メダカの育ちけり

東京

遊橋恵美子

片陰へ母のかひなをついと引く

浴衣がけ本所七不思議研究会

伊能忠敬

オフィスに地図御用所跡や朝ぐもり

七夕や「すずめのお宿」にお話し会

鬼灯市水遣りの水立ち上る

さいたま

須藤美智子

高速道雲の峰まで続きをり

河童橋渡り登頂す夏の山

老鷲や山を削りて施設建つ

凌霄の花に攻められ農具小屋